２０２５年3月３１日（月）

老球の細道８６１号

３月の言葉

会津バスケットボール協会　　室　井　冨　仁

福島県が生んだカエル詩人・草野心平の『春のうた』がある。「ほっ　まぶしいな。ほっ　まぶしいな。みずは　つるつる。かぜは　そよそよ。クルルン　クック。ああいいにおいだ」２月の記録的な大雪を乗り越えて、ようやくうららかな春を感じられる季節になった。

３ 月は Ｂ リーグディレクター、バスケットクリニック、バスケット大会と試練と充実の日々であった。私の人生を変えた「バスケットボール」、令和の時代を席巻できるだろうか。

１・テレビから

◆「世の人はわれを何とも言わば言え。わがなすことは我のみぞ知る」〈BS11『偉人』敗北からの教訓・坂本龍馬〉：司馬遼太郎『龍馬が行く』を読んで龍馬に心酔した。「この世に生を受けたるは、ことを成すことにあり」も大好きな言葉である。龍馬を暗殺したのは京都見廻組隊士の佐々木只三郎と言われ、会津藩出身で当時日本一の剣士と称された。

２・読書から

◆「体は飯を食わせれば大きくなりますが、心はそうはいきませんやろ。心の糧は五感を通して心の底に移る万象を正しゅう判断して蓄えること。これが心に飯を食わすということ」〈西岡常一『木のいのち　木のこころ』草思社〉： 法隆寺専属の宮大工で「法隆寺の鬼」と称された人の言葉。良い仕事をするには心の成長が口癖だった。バスケットも以下同文。

３・新聞から

◆「壊れた家に屋根はない。それでも、空を見上げて眠りたい。青い空が、奇妙に広い・・・。私たちに残されたのは思い出だけなのだ」〈朝日：天声人語〉：ガザ地区の様子を毎日伝えてくれたガザに住む朝日新聞通信員ムハンマド・マンスールさん（２９）の言葉である。この言葉を伝えた７日後、自らも爆撃を受けて亡くなった。「もう、私は世界を信じられない。ただ、それでも、私は言葉を書き、写真を撮り続けるしかない」。本物のジャーナリスト。

◆「ずっと福祉をやっていて難しいのは、自分の心、つまり煩悩との闘いと言うことです。自分がこれだけやっている思ったら、もうおしまいです」〈朝日：広告：人はなぜ生きるのか〉：災害ボランティアや刑務所慰問など社会福祉にも尽力する俳優杉良太郎の言葉。よく自分だけが頑張っているとグチる人がいるが、本当に頑張っている人は何も言わない。

◆「夢を殺してしまう“ドリームキラー”は必ずいる。親とか先生とか身近な人ほど、そうなる」〈朝日：菊池雄星（野球）〉： 指導者は目先の一生より、その選手の一生を大切にしなければならない。指導者の想像を超える成長は、常に大きな目標を抱かせ、信じて待つこと。

◆「死という終わりがあると認識するからこそ、輝くものがある。人生は一度だけの旅、限界を感じれば、感謝の思いがわいてきます。感謝することで豊かになっていきます」〈朝日：精神科医・清水研〉： 毎朝一番に見る新聞の「お悔み案内」。身近な人の名を見つけ明日は我が身。持ち時間も少なくなり「ことを成す」こともまだならず。日々感謝で生きるのみ。